

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	William Bradley Horton
論文題目	History Unhinged: World War II and the Reshaping of Indonesian History
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、ウィリアム・ブラッドリー・ホートン氏が30年以上かけて積み上げてきた、インドネシア近現代史研究の集大成と言える。ホートン氏は、研究をアメリカの大学生時代に開始し、以後いくつかのアメリカの大学院で、著名な先生方の指導を受けてきた。特にミシガン大学では、歴史学と人類学を融合する研究方法を学んだ。それが今日、ホートン氏の研究の方法論的基盤となり、研究にユニークな視点を与えるものとなっている。本論文でも、その点を説明することから始めている。</p> <p>本論文におけるホートン氏の論点は大きく2つある。一つは、今までのインドネシア近現代史の歴史研究、特に研究の方法についての批判と、それに代わる新しい方法の提起である。第二に、そうした新しい視点から日本軍政下のインドネシアという特定の時代を検証することで、今まで見えてこなかった、あるいは扱われてこなかった歴史的事象を明らかにして、それらと従来から知られてきた歴史的事象の関連を示そうとすることである。以下、各章ごとに、内容を述べ、その中でホートン氏が強調する点を説明する。</p> <p>論文は全体で6章構成となっている。第1章は、序論の部分となっている。ここでホートン氏は従来のインドネシア近現代史研究を概観し、以下のような問題点を指摘している。1) 従来、歴史学者は、各自が専門とする時代をそれぞれ単独で扱い、前後の時代から切り離して見てきた。その結果、自己が扱う歴史的事象の前後の時代との因果関係や流れを見失ってきた; 2) この傾向が特に強くみられるのが、日本軍政下のインドネシアで、その理由は、当該の歴史研究はさまざまな言語を扱う能力が要求されること; また、時代的に数年間のことであったため、この時代をそれ以前のオランダ植民地時代、あるいはそれ以後、1949年のインドネシア共和国独立後の歴史区分の中に組み込んで考える傾向があるためであるとしている。その代り、日本軍政下時代の出来事は、オランダ植民地時代から萌芽が見られ、また以後のインドネシア共和国成立に至る歴史的流れを作り出す役割を果たしており、この点について精査する必要があるとしている。これを達成する方法として、公表されている文献資料ばかりではなく、関係者への聞き取り調査、インドネシア人コミュニティに伝承されてきた社会的記憶の再構築、さらには、公式歴史資料からは外されがちな情報源(小説など)を資料として歴史を組み立てるべきであると論述している。</p> <p>第2章、第3章は、第1章で述べたことを実証する内容となっている。すなわち、第2章では、植民地時代末から日本軍政下で政治活動家として重要な役割を果たしていたが、インドネシア近現代史の表舞台から姿を消した政治活動家、アブドゥルカリーム・エム・エス(Abdoe' lxxrim M.s)と、正統派文学作品の作者という評価を得ることになった、作家兼出版社主タマル・ジャヤ(Tamar Djaja)という2人のインドネシア人作家の活動について、彼らの小説の内容分析はもとより、彼らの出身、生活の社会的背景など、詳細に論述している。また他の作家の活動も合わせて紹介しながら、こうした社会小説が及ぼした、当時のインドネシア社会への影響について述べている。また、そうした作家が実は社会活動家として、多岐にわたる行動をしていた点に注目し、当時の言論弾圧を回避するため、盛んにフィクションを執筆していったとしている。</p> <p>第3章は、社会の中に伝わる言説と、それを通して伝えられる記憶について論述している。1721年にオランダ植民地政府への謀反の罪で処刑された、ピーター・エルベルフェルト(Pieter Erbervelt)について詳細に説明している。処刑後エルベルフェルトの頭蓋骨は見せしめのため、石膏で固められて壁の上に突き刺したモニュメントになり、晒ものとされた。しかしこのモニュメントは、日本軍がジャカルタに入城した際、軍関係者によってオランダ植民地政府と戦った者として称えられ、オランダ植民地時代の権威の痕跡を排除するため、仰々しい儀式をもって取り除かれ、破壊された。この事実の分析から、当時のインドネシア社会においてコミュニティ</p>	

の人々がどのようにピーター・エルベルフエルトを受容し、理解しようとしたのかについて論述し、消されてもなお言説として残る歴史の再構築の重要性について述べている。

第4章は、従来のインドネシア近現代史の歴史学者が、それぞれ自ら扱う資料だけを基礎として日本占領期のインドネシア史を個別事象に偏って紋切り型に思い込んで構築したことに反証する目的で、そうした歴史学者があえて避けてきた感のある従軍慰安婦の問題にふれ、当時インドネシアを占領した日本軍は 100%男性だけで構成され、そのことが、日本軍関係者が現地女性へ蛮行を働いた原因として信じられてきたことへの疑問から、日本軍占領期にインドネシアにいた日本人女性について精査している。その結果、実は多数の日本女性がインドネシアで活動していたことを明らかにし、この事実と一般の歴史理解のおけるズレについて言及している。

第5章は、第4章との関連で論述する章となっているが、時代的にインドネシア共和国独立後の出来事を扱っている。1970年代、インドネシアのブル島にいた政治犯が述べた元従軍慰安婦についての論述書を歴史資料として分析し、その結果を論述している。1990年代以降、現在進行形の形で起こる慰安婦の問題の一端が、政治目的をもって意図的に歴史を変更してきたことにあると述べている。すなわち 1970年代に論述され記録された事実は、2000年以後、「記憶違い」として扱われ、歴史の書き換えが行われたとしている。そうした書き換え問題を述べるにあたり、ホートン氏は、どちらが正しい、間違っているという議論をするのではなく、記憶を残した時代や記録者の政治的意向など、どういう目的で、またどのようなプロセスを経て書き換えが行われていったのかについて精査することが重要であるとしている。

第6章は、結論の章となっており、論文の冒頭に述べた従来のインドネシア近現代史の問題点を再び述べ、それらを解決する方法として、歴史事実をそれぞれ個別的に扱うのではなく、社会的文脈のなかでお互いに関連し合った事象の流れとしてみるべきであることを再度強調して論文を終えている。

審査委員会では全員が、本論文が、豊富な情報を含む点、今まで明らかにされてこなかった事実を示している点を評価して、学会に多大に寄与することができる労作との評価を下した。委員の一人は、ホートン氏がアメリカから日本へ研究拠点を変えてもなお、研究を貫徹してきた情熱を称賛し、そうして苦勞してきた個人的経験が論文作成に反映されているとし、労苦を称えた。しかし、同時に委員からは、いくつかのかなり厳しい、修正すべき課題も示された。出された指摘をまとめると次のようになる。1) 資料として小説などを使った点は、新しい方向性を開く点で評価できるが、それに合わせて、当時の歌、映画なども資料として開拓してゆくべきではないか; 2) 日本軍政下のインドネシアについては、日本人学者により詳細の研究が出ており、それらは社会的コンテキストも十分に考慮しているのではないか; 3) 各章に論文の主張が出ているが、まだ、章がバラバラの感が否めない。特に第1章の問題提起〈歴史をつなげる〉について、第6章の結論で十分に応えていないように思われる; 4) 小説を資料として使い、作家の生まれ育った社会的背景、活動した社会的舞台、考え方などが詳細に述べられているが、そうした小説の読者についての言及がほとんどない。社会的コンテキストを重要視するという主張ならば、読者についても調査する必要があるのではないか。

これに対して、ホートン氏からは次のような回答がなされた。小説と同時に、当時インドネシア社会に流布していた歌、映画など、民衆が接することができた他の情報媒体の調査は確かに重要で今後研究を続けてゆく上でそれらの調査を行ってゆく必要がある。また日本人研究者の詳細な研究は承知しており、参考となるが、それでも彼らの研究は個々の歴史的事象にこだわりすぎている感があり、それらをつなぎ合わせて流れを見てゆくことが重要であると思われる。また、第1章と第6章の部分が必ずしも一致していない点について、今後出版にむけて改める必要があると考える。小説の読者については、自身情報がほとんどなく、だれが具体的に小説を読み、どのようなインパクトが実際あったのかについては、今後のフィールド調査を含めて調査してゆくべき課題である。

以上、いくつか解決すべき問題はあると認識しつつも、審査委員全員が、インドネシア語はもとより、英語、オランダ語、日本語、そして他のインドネシアの少数民族の言葉を駆使しながら作り上げた論文であり、研究環境

が大きく変わる中、自身の考えを検証するため精力的に研究を続けてきた姿勢、また新しい分野の資料を開拓して独自の見解を示し、インドネシア歴史学界ばかりではなく、文化人類学界にも貢献できる内容を多く含む点を高く評価した。結果的に、全員一致して、本論文は博士(文学)の学位授与にふさわしいものとの結論に至った。

公開審査会開催日	2016 年6月22日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏 名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	西村 正雄	文化人類学・東南アジア研究	Ph.D. (The University of Michigan, Ann Arbor)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	海老澤 衷	日本中世史・東アジア村落史	博士(文学) 早稲田大学
審査委員	早稲田大学・名誉教授	後藤 乾一	日本・インドネシア関係史	博士(法学) 慶應義塾大学
審査委員	The Department of History, The University of Michigan, Ann Arbor・Professor Emeritus	Rudolf Mrazek (ルードルフ・ムラザック)	インドネシア近現代史	Ph.D. (Czechoslovak Academy, Prague)